

国分寺崖線の歴史的変遷に関する基礎的研究*

A Basic Study on Evolution of Kokubunji Terrace Cliff

寒 河 江 朋 之** 天 野 光 一*** 押 田 佳 子****

By Tomoyuki SAGAE Kouichi AMANO Keiko OSHIDA

摘要：今後のまちづくりに際して参考となるべき知見の土台を得るための試論として、狭山丘陵から世田谷区まで全長約 30km の連続した崖の連なりである国分寺崖線を取り上げ、国分寺・小金井市域における崖上・斜面地・崖下の明治以降から現在までの歴史的変遷を捉えた。その結果、崖上は雑木林から別荘地化の後に宅地化した部分が大半で、斜面地は雑木林から高級別荘の庭園となった後、宅地化した所と保全緑地化した所に分かれた。崖下は水田が消失して宅地化した所と公園化した所に分かれた。

1. はじめに

国分寺崖線(以下、崖線)は古代多摩川が造った全長約 30km の河岸段丘で、狭山丘陵から国分寺市、小金井市、三鷹市を経て世田谷区二子玉川に至る、高低差 10~20m の崖の連なりである。この崖線周辺は元来樹林地であったが、宅地開発の進行に伴い、もとの地形や湧水、雑木林が消失しつつある¹⁾。

このような背景から本研究では、今後の都市開発やまちづくりの実施に際してその参考となるべき土台の知見を得るため、崖線の斜面地とそれを挟む崖上及び崖下地域の歴史的変遷を明らかにすることを目的とする。

2. 研究の位置づけ

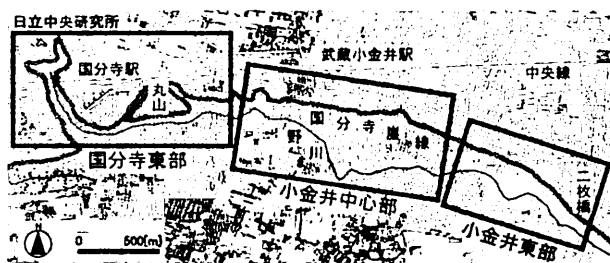
本研究に関連する既往研究には、崖線沿いの別荘分布を概略的に捉え、別荘の活動形態と時代背景を示したもの²⁾、崖線の二子玉川地区を対象とし、明治・大正期の別荘の地形的立地特性について明らかにしたもの³⁾、崖線周辺に立地した別荘の地形的立地特性と別荘敷地内部のしつらえを明らかにしたもの⁴⁾がある。

これらの研究では崖線沿いの別荘の立地特性やしつらえについて研究がなされているが、別荘敷地以外の崖線

および周辺の時代的な変化については言及されていない。

本研究は、崖上・斜面地・崖下を断面的観点から捉え、近代以降の土地変容を一連の流れで捉えようとする点で、既往研究とは異なる。

3. 研究対象



図一 対象範囲及び主要地域 (1970 年)

(1970 年 1/2.5 万地形図⁵⁾ ⁶⁾より作成)

本研究の対象地域は、崖線の西部にあたる国分寺市及び小金井市とし、崖線にほぼ並行して流れる野川及び湧水環境と密接な繋がりを持つ範囲とした。具体的には、野川の主流流である日立中央研究所から、西武多摩川線と交差する二枚橋までを対象とする(図一)。

また、対象地域は場所によって変遷が大きく異なるため、国分寺東部、小金井中心部、小金井東部の 3 区域に

*keyword：国分寺崖線，武蔵野，歴史的変遷

正会員 日本大学学生理工学部社会交通工学科 *正会員 工博 日本大学教授理工学部社会交通工学科

****正会員 農博 日本大学助教授理工学部社会交通工学科 (〒274-8501 千葉県船橋市習志野台7-24-1 735号室)

分け、研究を進めた。

本研究の対象時期は、近代開発の影響を受けたとみられる 1868（明治元）年から現在までとする。

4. 研究方法

本研究では、資料からの読み取り調査及び現地踏査を行った。主な調査資料を表一 1 に記す。

表一 1 本研究で用いた主な調査資料一覧⁷⁾～¹⁵⁾

武蔵野(国木田独歩)1939年※1	
武蔵野夫人(大岡昇平)1953年※2	
小金井市誌 I 地理編(小金井市史編さん委員会)1968年	
小金井市誌 V 地名編(小金井市史編さん委員会)1978年	
続々小金井風土記(芳須緑)1990年	
殿ヶ谷戸庭園(住吉泰男)2007年	
1/2万地形図 府中(大日本帝国陸地測量部)1906年	
1/2万地形図 田無(大日本帝国陸地測量部)1906年	
多摩地形図(清水靖夫)2004年	他

※1 1901年に単行本が発行されたが、本研究では文庫本を用いた。

※2 1950年に単行本が発行されたが、本研究では文庫本を用いた。

5. 結果および考察

調査の結果、崖線の変容を「武蔵野農村期」、「武蔵野別荘期」、「国分寺開発期」、「小金井中心部開発期」、「斜面緑地保全運動期」の 5 時期に分類することが出来た。以下、この分類に従って各時期の傾向と考察を述べる。

(1) 武蔵野農村期

(1868 年（明治元）年～1909（明治42）年）

この時期は、崖上に雑木林と畑が広がり、斜面地には雑木林、崖下には野川に沿って水田が広がっていたことで特徴づけられる。国木田独歩は小説『武蔵野』⁷⁾で明治 30 年頃の東京郊外武蔵野を描いた。この中で国木田は「美といわんよりむしろ詩趣といたい」と武蔵野の情景を絶賛している。

また、「今の武蔵野は林である」、「野末から野末へと林を越え、杜を越え、田を横切り、また林を越えて」、「野やら林やら、ただ乱雑に入り組んでいて、忽ち林に入るかと思えば、忽ち野に出るといような風」といった記述から、当時は自然豊かな農村景観が周辺に広がっていたことがうかがえる。

なお、明治 22 年に甲武鉄道（後の中央線）が開通し、国分寺駅が開設されたが、当初南口は開設されず北口のみであったことから、崖線とその周辺には影響を及ぼさなかった。

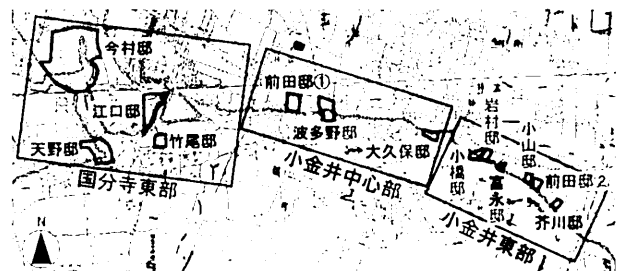
(2) 武蔵野別荘期

(1910（明治43）年～1955（昭和30）年）

この時期は、小金井の前田別荘、国分寺の江口・岩崎別荘(現殿ヶ谷戸庭園)をはじめとする高級別荘が崖線上に建設されたことで特徴づけられる。

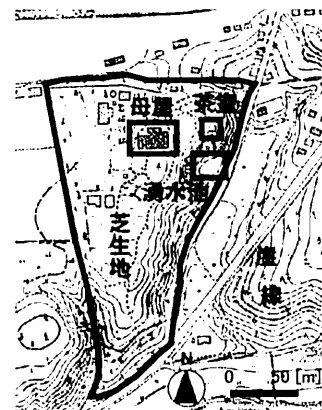
これらの別荘が立地した背景としては、十代田²⁾が「健康志向の高まり一大気療法の普及」、「交通の発達—私鉄の登場と自動車の普及」、「国木田独歩の小説『武蔵野』に起因する武蔵野ブームの到来」の 3 つの理由を挙げている。十代田²⁾と芳須¹¹⁾によると、大正初期には武蔵野の自然の魅力を語ることがブームとなり、富裕層が宅地開発の及んでいないこの地に別荘を買い求めたことが述べられている。

こうして崖線沿いに立地した高級別荘は、会社社長や軍人、医師などの富裕層が崖上、斜面地、崖下を含む広大な土地を購入し、そのうちの多くは眺望の良い崖上に母屋や茶室を設けた。斜面地の雑木林には散策路が設けられ、崖下に湧水による池を配し、回遊式林泉庭園を造成した。これらの多くは 1923（大正 12）年の関東大震災以前に、対象範囲全域において一様に建設された。



図一 2 崖線沿いに立地した別荘の敷地と位置
(1952, 1954 年 1/2.5 万地形図¹⁶⁾¹⁷⁾より作成)

対象地域における高級別荘は、図一 2 に示す合計 13 棟が確認できた。以下、このうちの江口邸を例に斜面地を含むしつらえがどのようなものであったかを検証する。



図一 3 江口邸の敷地としつらえ
(多摩地形図(清水)¹⁵⁾より作成)

図一 3 より、崖線の北側が崖上、南側が崖下である。敷地内の庭園と母屋の位置を確認すると、崖上の台地上に母屋と茶室があり、母屋のすぐ南側には広大な芝生地がある。芝生地の中央を南北方向に散策路が貫いている。崖下には湧水池が存在し、崖上と崖下を挟む斜面地は本

来の雑木林をそのまま活用しつつ、散策路が設けられている。和洋折衷の母屋や茶室などのしつらは、当時の典型的な郊外型別荘であった。

また、昭和初期には別荘の持ち主が変わる事例がいくつかみられた。先述の江口邸は1929（昭和4）年に岩崎家の所有となり、江口邸時代には無かった茶室の設置や母屋の増設など、敷地を大幅に改変していることを捉えた。

江口邸に類似した事例には、1948（昭和23）年の崖線を舞台とした大岡昇平の小説『武蔵野夫人』⁸⁾にもみられる。「水があり日溜りになっているところも気に入ったが、何よりも気に入ったのは富士が見えることであった」、「樹木を愛した彼はもともと樹の多いこの地面に、さらにさまざまな珍しい観賞用の樹木を植えたが、泉と同じ高さに崖を切り開いて建てた家のそばでは、樹をことさらに軒に近づけ、葉によって富士の眺めが遮られないようにした。」といった記述から、作庭時に富士が見えるよう工夫していたことが分かる。また、別荘敷地内でのしつらえについても詳細に描写されている。

（3）国分寺開発期

（1956（昭和31）年～1969（昭和44）年）

この時期は、1956（昭和31）年の国分寺駅南口開設に伴い、約15年間で国分寺駅南側の崖線周辺の宅地化が進行したことで特徴づけられる。

特に崖線の一部である丸山の周辺や国分寺駅南側の崖上における宅地化が著しく、1952（昭和27）年では一面が雑木林だったが、1970（昭和45）年では一面が宅地化したことがわかる。これにより、丸山の雑木林は消失した。一方、小金井中心部の武蔵小金井駅南口は商店街が拡大したが、斜面地まではその影響を受けず、雑木林が残った。

（4）小金井中心部開発期

（1970（昭和45）年～1984（昭和59）年）

この時期は、国分寺東部にやや遅れて武蔵小金井駅南口の商店街が更なる拡大を見せ、崖線上の斜面地である質屋坂や小金井街道の周辺にも一様に建物が立地したことで特徴づけられる。ただし、すでに公有地化されている元別荘地や寺院境内などには雑木林が残り、国分寺東部より宅地開発の影響が少ない。小金井東部の斜面地も、一部を除き宅地開発の影響を受けなかった。その一因として、国分寺と比べて斜面地の傾斜が急であることが考えられる。

小金井東部に残っていた水田は1970（昭和45）年に消失し、その後武蔵野公園の一部として調節池が建設された。

（5）斜面緑地保全運動期（1985（昭和60）年以降）

この時期は、国分寺と小金井の両市民が、緑地や湧水量の減少に対する危機感から、崖線の水と緑を復活させるために自然環境の保全運動団体を発足・活発化させたことが特徴といえる。これらの主な活動内容は対象地の清掃や保存に対する署名運動であり、こうした運動の結果、緑地の公有地化は年々進んでいる。また、武蔵野公園の一角を利用してビオトープを造り、豊かな生物環境を復活させる運動も行われている。

6. まとめ

本研究では、明治以降の国分寺・小金井市域における崖線の歴史の変遷を以下のように捉えた。

- ①中央線の開通によって、崖線の崖上に広がっていた畑と屋敷林は、国分寺東部では国分寺駅を中心とした宅地開発が行われ、雑木林が消失した。小金井中心部では武蔵小金井駅南口を中心として商店街が拡大し、小金井東部は宅地化が進行した。
- ②雑木林であった斜面地は、高級別荘の敷地となった場所では崖上から崖下に至る回遊式林泉庭園が造成された。その後、国分寺東部や小金井中心部は宅地化した。小金井東部には雑木林が多く残った。
- ③野川の両岸に水田が広がっていた崖下は、湧水量の減少等によって水田が消失し、国分寺東部、小金井中心部の水田跡は宅地化した。小金井東部では水田跡が武蔵野公園の一部となり、市民の憩いの場となった。

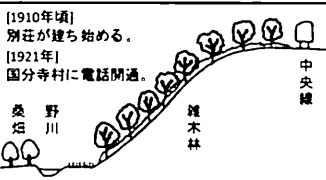
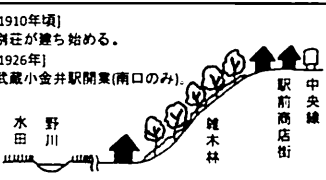
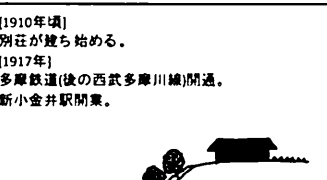
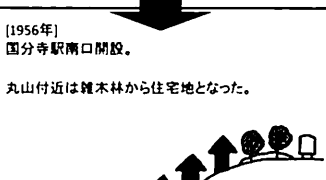
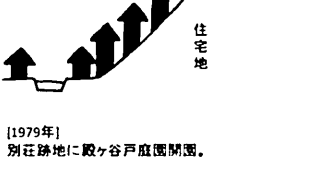
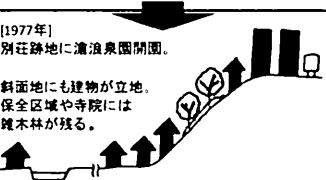
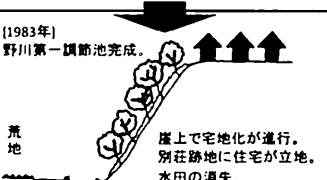
参考文献

- 1) 角田清美：国分寺崖線，平成14年。
- 2) 十代田朗：戦前の武蔵野における別荘の立地とその成立背景に関する研究，1992年。
- 3) 小谷野真由巳：国分寺崖線の地形からみた別邸敷地選定の特徴，2007年。
- 4) 小谷野真由巳：国分寺崖線沿いの近代別邸の地形的立地特性と敷地内部のしつらえに関する研究，2009年。
- 5) 国土地理院：1/2.5万地形図 立川，1970年。
- 6) 国土地理院：1/2.5万地形図 吉祥寺，1970年。
- 7) 国木田独歩：武蔵野，1939年。
- 8) 大岡昇平：武蔵野夫人，1953年。

- 9) 小金井市史編さん委員会：小金井市誌Ⅰ地理編，1968年。
- 10) 小金井市史編さん委員会：小金井市誌Ⅴ地名編，1978年。
- 11) 芳須緑：続々小金井風土記，1990年。
- 12) 住吉泰男：毆ヶ谷戸庭園，2007年。
- 13) 大日本帝国陸地測量部：1／2万地形図 府中，1906年。
- 14) 大日本帝国陸地測量部：1／2万地形図 田無，1906年。
- 15) 清水靖夫：多摩地形図，2004年。
- 16) 芳須緑：小金井風土記，1983年。
- 17) 芳須緑：続小金井風土記，1986年。
- 18) 芳須緑：小金井風土記余聞，1996年。
- 19) 高橋林蔵：ふるさと小金井の八十年，1985年。
- 20) 今尾恵介：多摩の鉄道沿線古今御案内，2008年。
- 21) 国分寺市史編さん委員会：ふるさと国分寺のあゆみ，2007年。
- 22) 小金井市：滄浪泉園 案内パンフレット，2011年。
- 23) 小金井市誌編纂委員会：写真でみるわたしたちのま

- ち小金井，1988年。
- 24) 鏑山英次，若林高子：生きている野川，平成3年。
- 25) 国分寺市市史編さん室：国分寺市制30周年記念写真集アルバム国分寺，1994年。
- 26) 鏑山英次，若林高子：生きている野川 それから，2001年。
- 27) 水澤静男：あの頃その頃の小金井写真集 増訂版，発行年不明。
- 28) 地理調査所：1／2.5万地形図 立川，1952年。
- 29) 地理調査所：1／2.5万地形図 吉祥寺，1954年。

表－2 主要3カ所の崖線断面の変化

時期	全体の出来事	国分寺東部	小金井中心部	小金井東部
1868年 武蔵野農村期 1909年	[1889年] 甲武鉄道開通 (後の中央線)。 [1901年] 国木田独歩、 『武蔵野』発表。	[1889年] 国分寺駅開業(当初は北口のみ)。	閑散とした農村集落が崖下にあった。 小金井街道両側は、雑木林に覆われていた。	[1898年] 鴨下製糸工場、ムジナ坂上に操業を開始。
1910年 武蔵野別荘期 1955年	[1914～1916年] 電燈が灯る。 [1923年] 関東大震災。 [1950年] 大岡昇平、 『武蔵野夫人』発表。	[1910年頃] 別荘が建ち始める。 [1921年] 国分寺村に電話開通。 	[1910年頃] 別荘が建ち始める。 [1926年] 武蔵小金井駅開業(南口のみ)。 	[1910年頃] 別荘が建ち始める。 [1917年] 多摩鉄道(後の西武多摩川線)開通。 新小金井駅開業。 
1956年 国分寺開免期 1969年	[1966年] 野川の改修工事。	[1956年] 国分寺駅南口開設。 丸山付近は雑木林から住宅地となった。 	崖上、崖下で宅地化が進行。 	 [1964年] 東小金井駅開業(中央線)。
1970年 小金井中心部開免期 1984年	[1970年] 野川沿いの水田、最後の田植え。 [1983年] 野川の改修工事。	 [1979年] 別荘跡地に毆ヶ谷戸庭園開設。	[1977年] 別荘跡地に滄浪泉園開設。 斜面地にも建物が立地。 保全区域や寺院には雑木林が残る。 	[1983年] 野川第一調節池完成。 
1985年 保全面運動地 現在	[2009年] 中央線 国分寺～三鷹間 完全高架化。	[1985年] 崖線の湧水の一部である「真姿の池湧水群」、 環境庁名水百選に指定。 [1998年] 毆ヶ谷戸庭園、東京都の名称に指定。 保全区域の他は、大半が市街地化。	[1985年] 滄浪泉園、新たに1000平方メートルが 緑地保全地区に指定。 [1993年] 別荘跡地の中村研一美術館に「美術の森」開設。 武蔵小金井駅や小金井街道、新小金井街道を中心として、市街地化が進行。	[1990年] 野川第二調節池完成。 斜面地は一部が宅地化。 二枚橋付近は雑木林がが多く残る。 調節池は武蔵野公園内にあり、普段は芝生として市民の憩いの場になっている。